

SSRI

ちょっと一言

Give me a break !

悪罵の国と非悪罵の国との文化的トランスレーション・ギャップ

樋 口 譲 次

5月26日付産経新聞『ソウルから』の欄に、黒田勝弘・ソウル駐在特別記者兼論説委員の『北朝鮮は悪罵が得意』という記事が掲載された。

悪罵（あくば）には、「ひどくののしること、口ぎたないののしり」との意味があり、日米などの西側流にいえば「ヘイトスピーチ（憎悪表現、喧嘩言葉）」に相当しようか。

黒田記者の記事によると、今回、トランプ米大統領が怒りをもって「米朝首脳会談」を中止した背景には、北朝鮮の米国に対する公開的な“悪罵”があるという。その代表例が崔善姫外務次官（女性）のペンス米副大統領に対し述べた「愚鈍な間抜け野郎」であり、和平交渉が進まなければ唯一の選択肢は「核と核の決戦」になるとの脅しである。

朝鮮半島の言語文化は、伝統的に他人への悪口が発達しており、翻訳を憚られるような卑猥な悪罵が飛び交うようで、それが戦闘的・扇動的な北朝鮮となると、外交の舞台を含め国ぐるみで悪罵を投げつける、との指摘である。

これは、自分を大きく見せようとする、一種の“中華思想”であり、中国もそのご本家として、ありとあらゆる罵詈雜言（悪罵）を得意としている。かつて駐日中国大使を務め、現在の外交部長（外務大臣）を務める御仁も、人後に落ちないのは広く知れ渡っている。

問題は、ヘイトスピーチを法律で厳しく制限しようとする西側の「非悪罵の国」と悪罵を日常茶飯事の得意技とする中国、北朝鮮、韓国などの「悪罵の国」との間に＜文化的トランスレーション・ギャップ＞が生じることであり、双方のトランスレーションにかい離が生じることで、緊張が高まり、ついには爆発にまで発展する危うさにある。この度の、トランプ米大統領による「米朝首脳会談」中止の決定は、その懸念が表面化し、北朝鮮の従来の手法が災いし逆効果を招いたと言えるのではなかろうか。

さりとて、中国、北朝鮮、韓国などの「悪罵の国」の外交（対外）姿勢は、文化的伝統に根ざしている以上、「千年の恨み」や「日朝対話は1億年たってもムリ」には戦術的な交渉術の要素が込められているとしても、国際標準に到達するには相当の歳月がかかるか、永遠に変わらないと見るべきであろう。そうであれば、厄介な隣人である「悪罵の国」の特性を知り、その特性に負けない外交手段あるいは手法を確立し、それを巧みに駆使して自ら国益を守るしかないのでなかろうか。（2018年5月26日）